

# パルミラ地下墓の研究(1)

泉 拓 良

## 1. パルミラの位置と過去の調査の概略

### 1) パルミラの概略

パルミラは、中東・シリア砂漠の中央に位置し、首都ダマスカスから230km、ユーフラテス河からも200km以上離れているオアシス都市である（図1）。古くから隊商都市として栄え、とくに紀元前一世紀から紀元後三世紀にかけてはシルクロード交易による莫大な富を得て、繁栄を極めたと言われている。

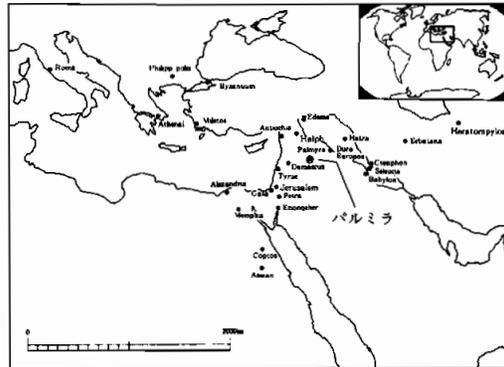


図1 パルミラ遺跡の位置 (Higuchi他 94)

遺跡は市街地とそれと取り巻くように分布する墓域からなる。市街地は、周囲約6kmの内側の城壁と、僅かな痕跡から全長22kmにおよぶと推定されている外側の周壁に守られている。市街地の、北、西、西南、東南には墓域が広がっていて、ビルディング形の塔墓と、神殿形の家形墓、地下宮殿風の地下墓などの墓が存在する。

### 2) 過去の調査

パルミラ遺跡が、ヨーロッパに知られるようになったのは17世紀の末である。1751年、イギリス人 R.ウッドが実地調査をおこない、パルミラについての最初の学術書『パルミラの遺跡』<sup>(1)</sup> を出版した。1754年にはフランス人とイギリス人がパルミラ文字の解読に成功している。1881年に発見された長文の関税法碑文は、古代東西交易の実態を詳細に記録した唯一のもので、貴重な研究史料と高く評価されている。

20世紀にはいると、まずドイツが中心となって発掘調査を行なった。第1次世界大戦後はフランスの委任統治領となったため、以後フランス隊が組織的に発掘調査を行った。1929年にはフランスは遺跡の中心地であるベール神殿の発掘調査に当たって、神殿内にあった小村を北東の新しい場所に移転させた。この新しい村が現在のパルミラ市である。最近では、バー

ルシャミン神殿周辺をスイス隊、市街地をポーランド隊、「墓場の谷」の家形墓をドイツ隊がそれぞれ発掘調査を行っており、シリア考古総局もパルミラ国立博物館が劇場地域を中心に修復を行っている。1990年から日本隊も東南墓地の地下墓の調査に加わった。

### 3) 東南墓地の発掘調査

東南墓地は、パルミラ遺跡市街地の東南部にあるベール神殿の南約1.5kmの砂漠の中にある。パイプラインの建設により、地下墓の一部が、1950年代にシリア政府により発掘されているものの、ほとんど調査されていない地域である(図2)。

1990年10月から11月に事前調査として地中レーダを用いて地下の電磁波探査を行い、地上からはその存在を明らかにできない地下墓を探査した。その結果、5地点において異常な反射を確認した。異常反射は山形をなすものと、溝状を呈するものなどであり、地下に遺構の存在する可能性を示していた。翌1991年7月から、典型的な山形の異常反射を示したA地点と、溝状の反射を示したC地点を選んで、3カ月間の第1次発掘調査を実施した。A地点で

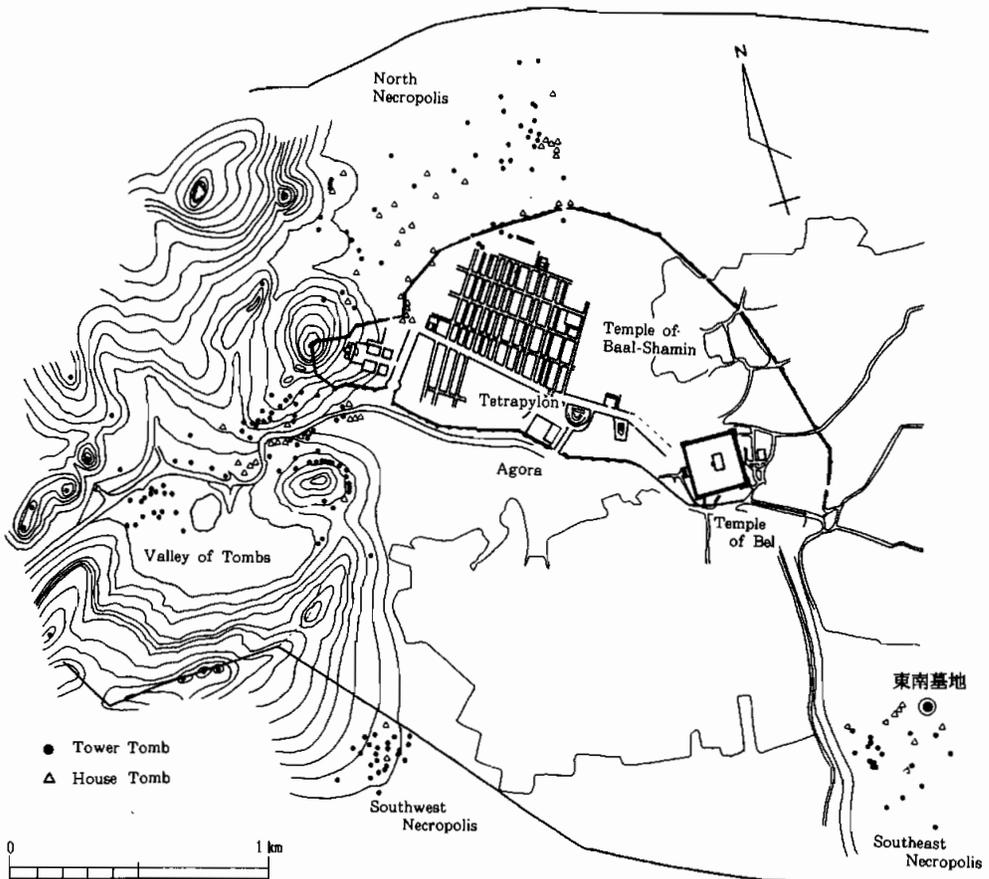


図2 パルミラ遺跡の遺構配置と東南墓地の位置 (Higuchi他 94)

発見した遺構は、予想に反して家形墓であり、山形の反射はこの家形墓の石壁に由来するものであった。一方、C地点では溝状の反射を示した所から、地下墓に通じる墓道の階段を検出した。このC号地下墓は既に天井が陥没していたため、第1次調査では、入口部を中心に発掘をおこなった。その結果、石造りの門扉と、墓建立碑文を発見し、この地下墓が西暦108年4月にマリコーの息子のルシャムシュの息子のイアルハイによって造られたことがわかった。

1992年4月から4カ月にわたる第2次発掘調査をおこない、このC号地下墓の全容を明らかにすることができた。発掘した人骨は61体を数え、棺を塞いだままの状態出土した葬送用彫刻など石彫類8点、土製ランプ・副葬品など多数を発見するなど、多くの成果をあげた。

C号墓は、盗掘の痕跡が無く、当時の埋葬習慣を知る上での貴重な資料を提供したと共に、改築の順序を明らかに出来る資料もあり、地下墓の詳細な検討が可能な遺構であった<sup>(2)</sup>。本稿では、この東南墓地C号墓を中心にして、地下墓における埋葬習慣の一端を明らかにしようとするものである。

## 2. パルミラにおける墓の形態

### 1) 墓の4形態

パルミラでは墓は「永遠の家」と呼ばれ、祖先崇拜の場とも言える特別の意味を持っていた。墓は一般的には4種類に分類でき、代々の一族を葬った塔墓、地下墓、家形墓と、一般個人墓とからなる。ただし、パルミラ研究の第一人者であるM.ガウリコフスキーは、地下墓を併設する塔墓を1型式に加えるべきであるという<sup>(3)</sup>。

#### ①塔墓

塔墓はパルミラで最も古い型式の墓で、外観は古くは方錘形、新しくは縦長の立方体を呈し、下部に段が付く(図3)。内部は数階に分かれ、石の段でつながっており、地下室や地下墓を伴うものもある。多くの埋葬施設が、古くは外壁面に、新しくは内壁面側に造られており、大きいものでは百体以上の埋葬が可能で、数世代にわたる一族が埋葬されたと言われている。

#### ②地下墓

地下墓は地表から階段で5～6m降りた所に入口を設け、トンネル状に墓室を造ったもので、内部は平面逆T字形を呈



図3 塔墓

するものが多く、埋葬施設は両壁面を掘り込んで設けられており、塔墓と同様に大きいものでは百体以上の埋葬が可能である。地下墓の形態については別に節を設けて詳述する。

### ③家形墓

家形墓は、外観は正方形の装飾豊かな家形を呈し、正面や中庭に石柱を配したものが多く。埋葬施設は塔墓と同じ石壁



図4 家形墓

面に作られていて、家族饗宴を表した彫刻の乗る石棺も多くみられる。装飾の最も豊かな墓である(図4)。この型式の墓も多数の埋葬施設を持っていて、前2者と同様に一族墓と考えられる。

このような多種類の墓の盛行する時期には、時間差が認められる。A.シュミット=コリネの集成による建造年代の確かな墓は表1に示すようになる。塔墓は紀元前9年に建造されたものが最も古く、紀元128年を最期に建造されなくなる。一方、家形墓は西暦143年建造が最古でありパルミラ滅亡期まで続く。また、地下墓は紀元81年に始まって、パルミラ滅亡後も続くようである。

一方、ガウリコフスキーと小玉新次郎は、1世紀前半に塔墓と地下墓の複合型式(塔墓が上にある地下墓、図5)が成立し、1世紀後半には、地下墓が独立して作られるようになり

	セレウコス暦	351	401	450	501	551
塔高	303	321	345	352	385	391
					415	430
					432	
					392	440
					395	
地下墓					395	
					393	401
					418	421
					435	445
池形墓					454	
					491	505
					544	551
					573	
池形墓						
					399	406
					420	425
					436	450
					456	
池形墓					410	426
					450	
					410	427
					450	
					428	
池形墓					430	
					455	461
					471	483
					524	537
池形墓					548	575
					462	

表1 パルミラにおける各墓形式の築造年代(セレウコス暦:前312年10月1日が元年1月1日になる暦, Schmidt-Colinet 1987による)

(独立地下墓)、2世紀半ば以降は、塔墓と複合墓が姿を消し、地下墓と家形墓だけが作られたとする。

しかしこの考えは、すぐには受け入れがたい。アケメネス朝ペルシャ時代のアムリット遺跡(紀元前6世紀頃)では<sup>(4)</sup>、すでに、地上に記念碑的建造物を持つ地下墓が成立しており、また、ドゥラ・ユーロポス遺跡<sup>(5)</sup>でも、形態は違っても、紀元前に遡りうる単独の地下墓が存在しているからである。系譜的には、塔墓と家形墓につながる型式であり、地下墓の成立展開は、これとは別に考える方が妥当性があるだろう。

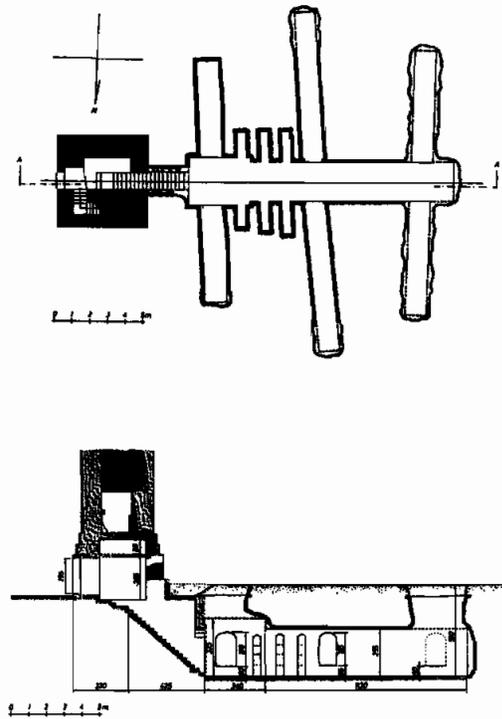


図5 地下墓付き塔墓 (Gawlikowski 70)

## 2) 地下墓の分類

地下墓は、地表から4～6 mの所に作られたトンネル状の墓で、階段で地上から降りていく。数10体から、100体を越える埋葬があり、一族の墓所であると考えられている。しかし、一部の納体室(柩ないし柩棚)が譲渡された例や、分譲された例があり、すべてを、家族墓、一族墓とはいえない。他の塔墓や家形墓は譲渡・分譲例は少なく、地下墓建設者との階級ないし階層の違いを暗示するのかもしれない。

地下墓の研究は、戦前から発掘調査が行われ、それなりの資料の蓄積はあったが、彫刻類や碑文の研究が中心であった。戦後は、ポーランド隊によって墓の谷(西側の墓地群)の発掘調査が体系的に行われ、現在の調査責任者であるガウリコフスキーによってその成果がまとめられている。彼によると、地下墓は平面形で、AからCの3類とその他に分類できるといふ。以下は、ガウリコフスキーの論文に従って記述する<sup>(6)</sup>。

### ①A型地下墓

地下墓の入り口部から奥に延びる主室を中心に、両側ないし片側に側室を備えた形態の地下墓である。著名なものとして、墓の谷にあるイアルハイ墓があげられる(図6)。紀元108年に構築されたもので、現在、ダマスカスの博物館に復原されている。入り口は柔らかい石灰岩と一部粘土質の土を掘って作られて階段が、階段と同じ幅ではほぼ正方形の天井のない前庭部に通じている。前庭部の右側には、石でできた小さな扉があり、死者の礼拝の道具を

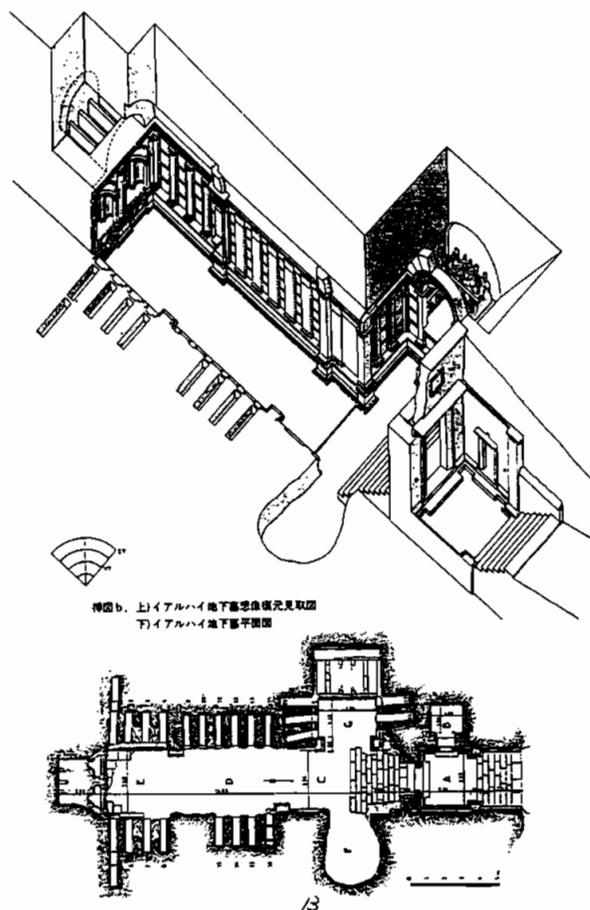
置くための小部屋がある。階段の真向いには石でできた門扉がある。扉の後ろには、階段が数段あって、墓の主室へ降りて行く。主室は、長さ14m、幅は3.25~3.60mで、円天井を支えるつけ柱によって支えられた石造りのアーチがあり、主室を3ヶ所に分けている。

主室の側面には二つの側室が掘られているが、明らかに主室より後世のものであり、東のものは未完成のままであった。西の側室は丁寧に裝飾されている。完全に石で飾られ、アーチ形の格間によって主室へ開いている。側室は柵欄を備えており（右に2列、左に3列）、奥の正面には、饗宴を表現する3枚の彫刻された板石が、横臥食卓に倣って石棺の上に直角に並べられて

いる。彫刻類、とりわけ柵を塞ぐ胸像彫刻はセリングによって紀元2世紀の終りに編年されている。この側室の設備がなされたのとはほぼ同時期であろう。側室は回廊とは同じ時期でないで、その入口が内部の階段によって塞がれている。108年の建造者は、その場所に側室を掘るとは考えていなかった。地下室墓には219の納体室を数えるが、一部は利用されていない。

原文によると、この墓はバリキーの息子のイアルハイ YRH $\bar{Y}$ によって108年に創建された。側室の碑文には、その時にはすでに確実に死んでいたイアルハイの父と叔父への第一級の場所が予定されていたことが付加されている。それは碑文が彫り刻まれた石の上に表されており、おそらく、独創的な休息所である主室正面であった。西の側室はその世紀の終りごろ付け加えられた。それ故、地下室墓は最初、附属物の無い主室とその回廊からなっていた。

241年、創建から1世紀半後、東の側室を含む東壁のすべてと、主室の壁がんの勝利の女神（ニケ像）までは、まだ空いており、その時の所有者によって売られている。



神図b. 上イアルハイ地下墓想像復元見取図  
下イアルハイ地下墓平面図

図6 イアルハイの地下室（A型）

その他に、ネボシュリ NBWŠWR の息子のボルハ BWLH' の墓 (89年、東南墓地)、ザブダテ ZBD'TH の息子のアテナタン 'TNTN の地下墓 (98年、西南墓地)、ユリウス・アウレリウス・マレ YWLYWS・'WRLYS・ML' の地下墓 (109?年)、マルコ MLKW の息子のマルコ地下墓 (121年、西南墓地)、イアルハイ YRHY とアテヌリ 'TNWRY とザブディボール ZBDBWL の地下墓 (133/134年、西南墓地)、年代のわからないものにザブダ ZBD' (墓の谷)、タイ T'Y (東南墓地)、ディオニソス DYNYS (西南墓地の地下墓) の地下室がある。

## ②B型地下墓

基本的にはA型地下墓と類似するが、回廊状の墓室が逆T字形を呈する型式。A型と比べて、とくに両側の側室が回廊状に長いのが特徴である。著名なものとして、紀元98年に作られた西南墓地のヌルベール NWRBL の息子のアブダストール 'BD'STWR の地下墓がある (図7)。

入口のすぐ後ろに逆T字形の回廊状の墓室があり、それぞれの奥に長方形の墓室がある。各回廊状と長方形の墓室には、それぞれ埋葬施設があり、柵棚が設けられていた。左側の側室の奥には、家族饗宴の彫像が乗る3基の石棺が、コ字形に並べられていて、横飲食卓の形態をとる。入口の門扉の上の長押には、長文の碑文があって、二つの側室の譲渡と、柵棚の所有に関する事が書かれていた。

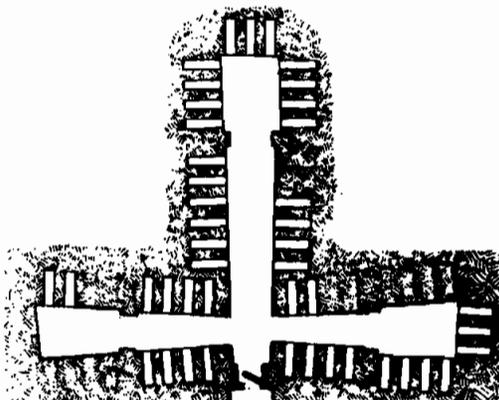


図7 アブダストールの地下墓 (B型)  
(Gawlikowski 70)

もう一つのB型地下墓の典型例は、西南墓地にある壁画で有名な「3兄弟の墓」である (図8)。紀元142/3年には、その一部が建造されたことは明らかであるが、全体の建設年代は不明である。この墓については小玉新次郎が詳しく紹介しているが、複雑な譲渡や売買が碑文によって明らかに出来る例であり、小玉は、この地下墓が「分譲あるいは全部を転売して利益を得る」ために作られたとしている。

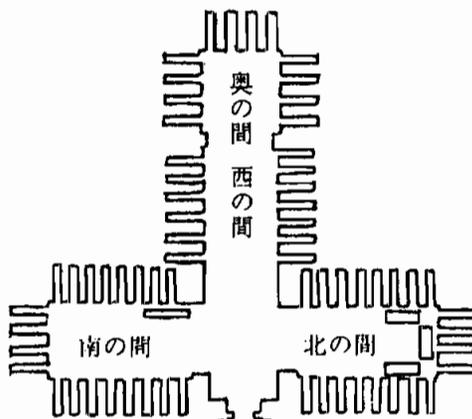


図8 3兄弟の地下墓 (B型) (小玉 80)

他に、イアダイ YDY の息子のハイラン HYRN の地下墓 (106/107年)、ルシャムシュ LŠMŠ の息子のルシャムシュ (181-188年) がある。

### ③C型地下墓

他の2形式とは異なった平面形をなす。出現は遅く、最古の例が紀元142年の建造である。典型例としては、西南基地のマルコ MLKW の息子のナスラルト NŠRLT の地下墓がある (図9)。

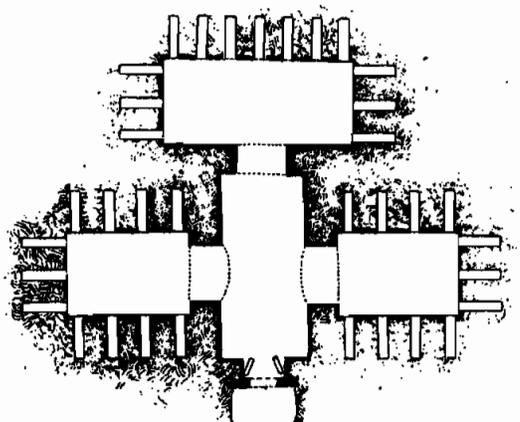


図9 ナスラルトの地下墓 (C型) (Gawlikowski 70)

この墓は、入口の後ろに長方形の何の施設もない部屋があり、他の3方向にヴォルト天井の短い通路があって、それぞれ主軸と直交する長方形の墓室に通じている。各墓室には、埋葬施設として柵棚が設けられている。紀元142年に建造され、263年と265年に9個の柵棚が譲渡されているが、120年以上使用されてからの譲渡であり、3兄弟の墓とは違う。

他に、147年建造のマルコ MLKW の息子のサラマラト ŠLMLT の地下墓がある。

### ④その他

年代未詳の東南基地にあるアルタバン 'RTBN に代表される逆干字形の地下墓である。恐らく紀元2世紀に下るものと考えられる。この変形とも見られる地下墓もある。

以上のように分類されているが、それぞれがどのような意味を持つかは、明快ではない。C型墓については、A・B型墓より出現が遅れ、あまり流行することもなかったと述べている。A型とB型を比べていずれが古いとは言えないが、起源との関係はどうであろうか。B型については、塔墓が上にある形の地下墓がその形態に似ている。しかしA型、B型ともに紀元1世紀末以降にしか類例が無く、独立した地下墓と言う点では、同時に始まったとしか言えない。

## 2. 東南基地C号墓

私達が1991/92年に発掘調査したC号墓は、ベール神殿の南約1.5kmにあり、東南基地の一角に位置している (図10)。東南基地は塔墓、家形墓、地下墓からなっていて、地上に現存する塔墓、家形墓については、T. ウイグランドによってその分布図が公表されている。その後、この地域を通過する石油と天然ガスのパイプラインの工事によって、11基の地下墓が発見され、シリア考古総局によって発掘されている。パイプラインは遺跡の保存のために、

この地域を迂回しており、シリアの遺跡保存、パルミラ遺跡重視の姿勢が具現化されている。ただし、発掘報告書は未刊のものが多く、この地域の地下墓の状況は未だに明らかでない。また、現地には、報告されていない塔墓ないし家形墓の基礎部分の発掘後があり、ウイグランドの分布図に書き加える必要な墓は多い。

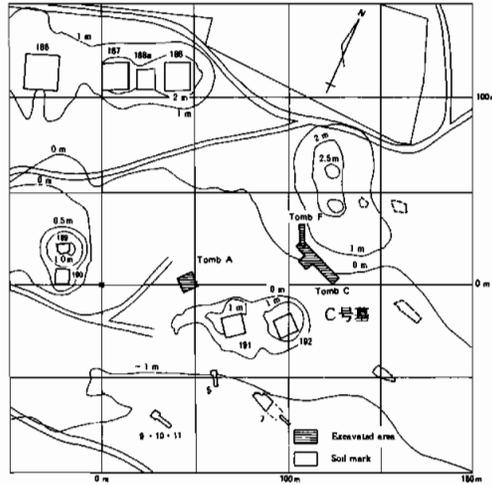


図10 東南墓地C号墓の位置 (Higuchi他 94)

### 3. C号墓の改築について

東南墓地C号地下墓は、東南墓地のほぼ東端に位置し、192号家形墓の北東にある小丘の南斜面に造られている (図11)。主軸はおおよそ南から45°東に振っていて、南東向きに開口している。墓道は約8m、墓室は約10mを計る。墓室は主室の前室と奥室、右側室からなり、平面形は逆L字形をなし、ガウリコフスキーのいうA型地下墓に当たるが、小型である。建造碑文から紀元109年4月にマリコ MLKW の息子のルシャムシュ LŠMŠ の息子のイアルハイ YRHÏ によって造られたことが明らかである。

詳細は報告書<sup>(7)</sup>に記載したので、ここでは、作り直しの問題と、埋葬場所について述べることにする。

#### 1) 作り直しの痕跡について

C号墓には、他のA型墓には見られない特徴があった。入口から入ってすぐ左側に、側壁に沿って石壁をもつ棚状の遺構があった点である。また、地下墓は基本的に、墓室は左右対称になるが、主室が20cmほど門の主軸から左 (入口から奥をみて左側) に寄っていた (図12)。

前室の柳棚 LL 5 では、柳棚

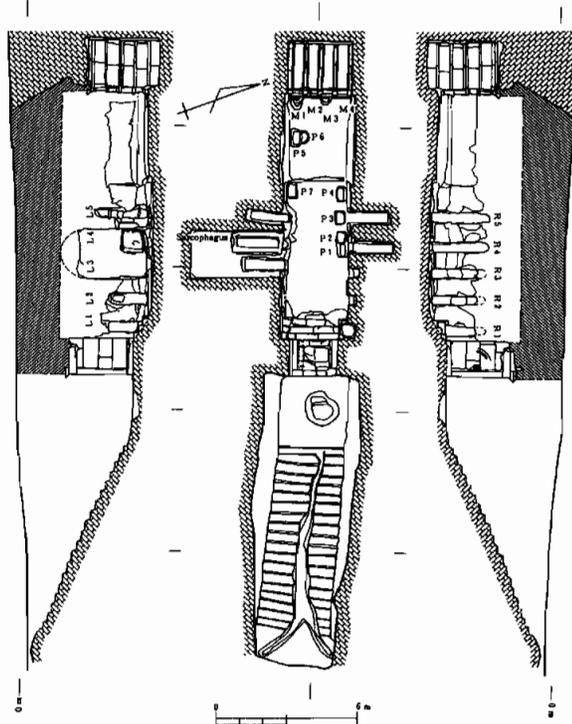


図11 C号墓の概略 (Higuchi他 94)

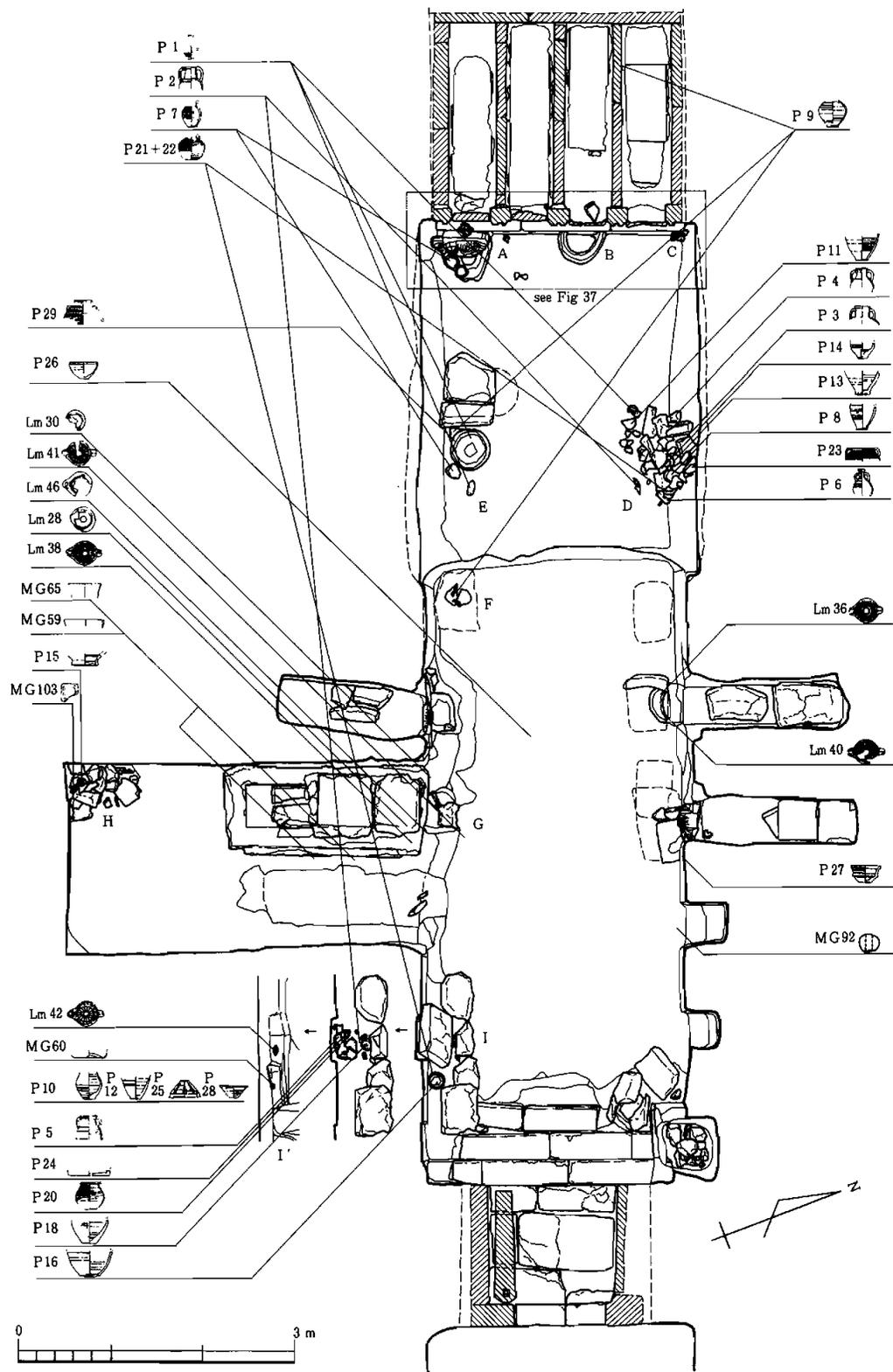


图12a C号墓 墓室平面图 (Higuchi他 94)

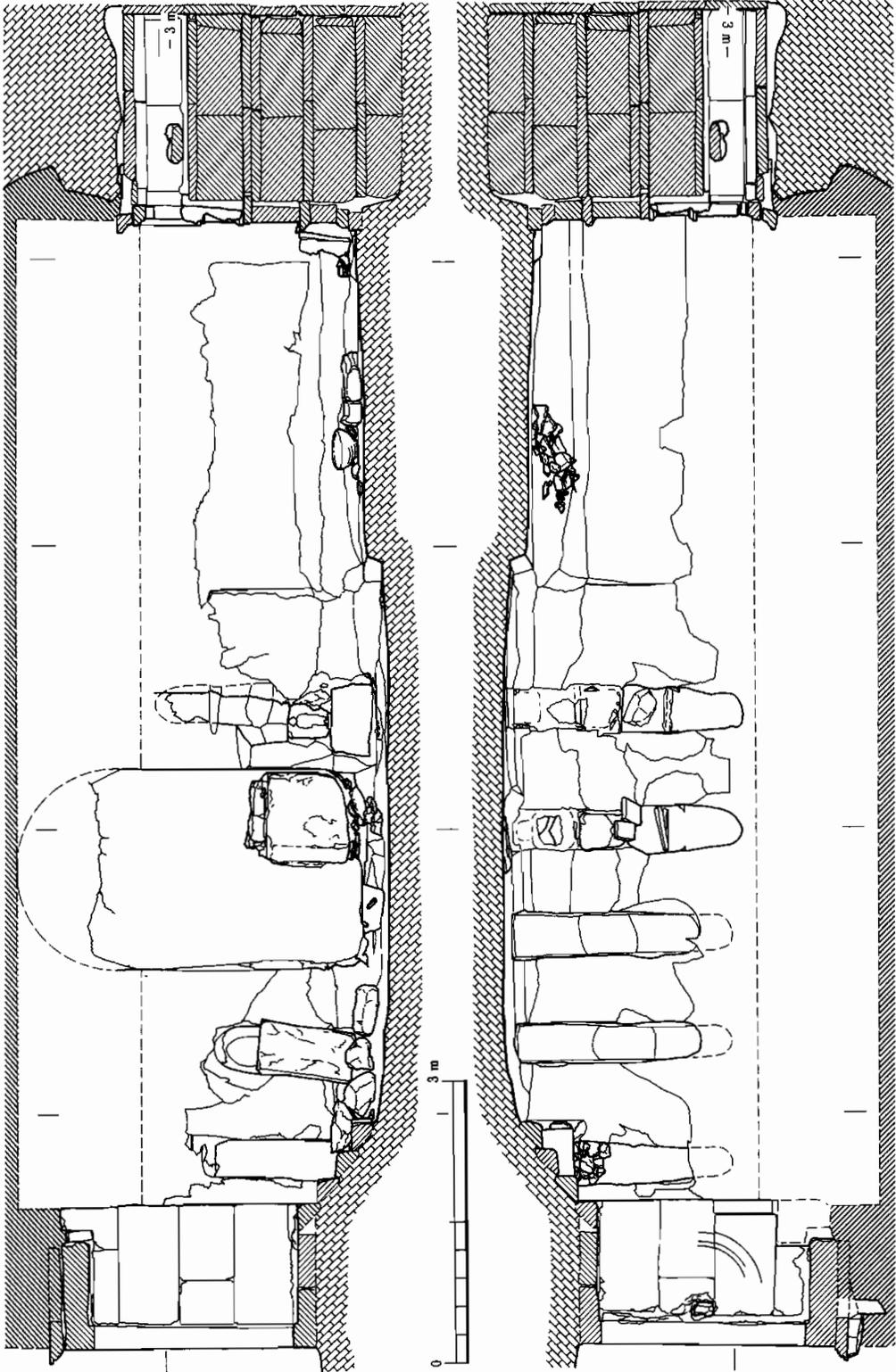


图12b C号墓 墓室断面·侧面图 (Higuchi他 94)

が造り直された痕跡があり、下から2段目の檜 LL5-1以上は一番下の LL5-0より20cm短く造られていた。したがって、最下段の LL5-0に葬られていた人骨の足の部分は、側壁面からはみ出していた。粘土層に掘り込まれた檜棚側面2段目あたりには、水で抉られたような跡が認められた。この壊れた部分の前面に、大きな板石を置いて、砂と粘土を充填して造り直しがおこなわれていた(図12)。

同様の水で抉られたような痕跡は、側壁のほぼ全面に認めることができたが、とくに奥室では、顕著であった。

左側室の床面で発見した、成人埋葬の埋葬施設 LL3-0は、異常な位置での発見である。C号墓で発見した他の7基の床面埋葬施設は小児埋葬であった。他の地下墓の例も、床面埋葬は小児埋葬に限られているようであり、左側室の成人埋葬例は特殊である。LL3-0は、成人葬というだけでなく、LL5-0と同様、左側壁面から前室の床面に約20cmはみ出している点でも異常である。石棺の下になっていたため発掘できなかった LL4-0も、同様の位置にあり、LL3-0と同じ性格の埋葬施設の可能性が高いと考えられる。

入口の後ろにある、石段にも同様な通常ではない痕跡が確認できた。右側は側壁に設けられた井戸の枠ぎりぎりまで石段が確認できたのに対して、左側は、約20cmの石段のない部分が認められた。

以上の事から、墓が完成し埋葬が始まった後のある時に、前室部分を左(南西)へ約20cmほど拡張した事が考えられる。拡張に伴ってか、その後に、LL3とLL4の上部を壊して左側室を作り、LL5を短くして改修し、新たに整形した左側壁に沿って石棚を造った可能性が高い。この造り直しの原因としては、この地下墓にある時、水が流れ込んで左の側壁と檜棚に大きな被害を及ぼしたことはないかと考える。

## 2) 作り直しの時期からわかること

水害の時期ないし作り直しの時期については、絶対年代は不明だが、正面の主檜部分を除き、各檜棚の埋葬の進行との関係は把握できた。先述したように正面に向かって左側も檜棚は、LL3-5は最下段(0段)のへ檜の埋葬が終わった後であり、LL5では一段目(LL5-1)への埋葬は作り直しの後と認められた。右側の檜棚でも、最下段の埋葬は水害前と考えられ、水害の残した壁面痕跡と檜の入口を塗り込めたモルタルの斬り合いから、RL4では1段目も水害前、RL5では1段目が水害後と考えられた。

以上のことをまとめると、左右の檜棚で



図13 C号墓 檜棚L・修復の痕跡  
(Higuchi他 94)

は、この地下墓が作られてから水害が起こるまでに、最下段は一斉に埋葬が行われたことがわかる。

一方彫像や碑文との関係を見ると、LL5の1段目に水害後に埋められた埋葬されたYRHYの娘'STRTが、人骨の推定から埋葬時の年齢が9-10歳であることを考えると、この地下墓をYRHYが作ってから、水害までの時間が余りなかったことが予想できる。また、YRHYの彫像と'STRTの彫像がT.インフォルトの言うパルミラの第1群(紀元50-150年)に属し<sup>(8)</sup>、その息子(長男)の'SLM'、次男'ML'の彫像が第2群(紀元150-200年)であり、ニケを配した中心の半円形彫刻も第2群であると考えれば、地下墓建造から水害の時期がやはり短期間と考えざるを得ない。また、半円形彫刻は息子の代になって、おそらく、改築に伴って作られた可能性が考えられる。

このように考えると、左右柳棚の最下段埋葬の埋葬時期と、期間が不自然に思われる。10年に満たない時間に成人が一斉に死ぬとは思えないのである。改葬を推定できる骨の配置ではなかったが、最下段の埋葬は、墓の谷のYRHY墓に見られたように、改葬を推定した方が自然と思える。また、改葬の時期の決定は、出土ランプの編年が可能であることを示しているが、このことは別稿に譲るとする。

#### 4. 埋葬場所による性別と年齢別について

##### 1) 埋葬場所による性別と年齢別について

C号地下墓では、埋葬した場所によって男女比や成人、未成年の比率が違う。以下では、中橋孝博<sup>(9)</sup>の分析に基づき、正面、主室前室左側壁、右側壁、床面の4カ所に分けて性別と年齢を見る(表2)。

##### ①主室奥室正面の柳棚群

ML1は男性8、女性4、未成年1、ML2は男性9、女性1、未成年2、ML3は男性3、女性1、未成年2、ML4は男性2、女性1、未成年1となり、正面の柳棚全体では、男性は22名、女性7名、未成年6名となる。ML1を除き各柳棚女性1名という点は、特徴である。未成年の年齢がわかるのは、1歳ないし以下が2名、6-7歳が2名、不明1名であったが、すべて成人との合葬であった。

##### ②主室前室右側壁柳棚群

RL4は男性3名、女性1名、RL5は男性1名、女性3名であり、右側壁柳棚全体では男性4名、女性4名で、男女同数であった。

##### ③主室前室左側壁柳棚群

LL5では男性1名、女性1名、未成年6名である。そのうち最多をしめる未成年は、9-10歳1名、4-5歳4名、1歳以下1名であり、以下で述べる床面埋葬と年齢構成で大きな

Loculus No.	Skeleton No.	Sex	Age	Estimated stature (cm)	AKJ**	Sculpture, Lesions and Burial Order
M 1-0		♂	Maturus	-	×	
1-1	A	♀	Adultus (about 20 yrs.)	159.8	×	[MLA], P. I. A. *** G→H→E→F→C→D
"	B	♂	Maturus (~Senilis)	168.6	○	
(1-2)*	C	♂	Maturus	165.9	○	
"	D	♀	Maturus (~Senilis)	153.1	×	
"	E	♀	Maturus	149.3	×	
"	F	♀	Adultus (about 20 yrs.)	-	×	
"	G	♂	Adultus	-	?	
"	H	♂	Adultus	-	-	
1-3		♂	Adultus	-	×	
1-4	A	♂	Adultus	161.2	×	P. I. A. } B→C→A
"	B	♂	Maturus	-	○	
"	C	?	Infant III (6-7 yrs.)	-	-	
M 2-0	A	♂	Adultus	157.1	×	D→B Osteoma on the right humerus E or F→C
(2-1)	B	♂	Adultus	165.5	×	
"	D	♂	Adultus	165.0	?	
(2-2)	C	♂	Adultus	-	?	
"	E	♂	Maturus	-	×	
"	F	♂	Adultus	164.4	?	
2-3	A	♀?	Maturus	-	?	D or B→A or C (cremated remains)
"	B	?	Child?	-	-	
"	C	♂?	Maturus?	-	?	
"	D	♂?	Adult	-	?	
2, 3-4	A	♂?	Senilis	166.5	○	P. I. A. } Fracture of the right ulna A→B
"	B	?	Infant III (7 yrs.)	-	-	
M 3-0	A	♂	Senilis	-	○	[YRHY] } A→B
(3-1)	B	♂	Maturus	-	○	
(3-2)	C	♀	Adultus	151.2	×	
"	D	?	Infant I	-	-	
3-3	A	♂	Maturus	170.2	○	[YRHY] } A→B
"	B	?	Infant III?	-	-	
M 4-0	A	♀	Maturus	-	×	P. I. A. } Fractures of the right humerus and both forearms
"	B	?	Infant I - II	-	-	
4-1		♂	Maturus	164.7	○	
(4-2)		♂	Adultus	165.2	×	
R 4-0		♂	Adultus	163.8	×	
(4-1)		♀	Adultus	-	×	
(4-2)		♂	Maturus	160.1	×	

Loculus No.	Skeleton No.	Sex	Age	Estimated stature (cm)	AKJ**	Sculpture, Lesions and Burial Order
(4-3)		♂	Adultus	160.6	×	
R 5-0		♀	Adultus	-	×	
(5-1~2)	A	♂	Maturus	-	?	
(5-2~3)	B	♀	Adultus	-	?	
(5-1?)	C	♀	Maturus	-	?	
L 3		♂	Maturus	160.6	○	[ASTRT]
5-0		♀	Adultus	-	×	
(5-1)		?	Infant III (9-10 yrs.)	-	×	
(5-2)		♂	Adultus	158.6	?	
(5-3)	A	?	Infant II (4-5 yrs.)	-	-	
	B	?	Infant II (4-5 yrs.)	-	-	
	C	?	Infant I (<1 yrs.)	-	-	
	D	?	Infant II (4-5 yrs.)	-	-	
(5-4)		?	Infant II (4-5 yrs.)	-	-	
Sarcophagus	Upper	♂	Maturus	169.3	×	Fracture of left femur Osteoarthritis of the left hip joint Fracture of the right radius
	Under	♀	Maturus (~Senilis)	155.7	○	
P 1		?	Infant I (new born)	-	-	
P 3		?	Infant I (<6 months)	-	-	
P 4		?	Infant I (7-8 months)	-	-	
P 5		?	Infant I (10-12 months)	-	-	
P 2		?	Infant I (<6 months)	-	-	
P 7		?	Infant III (5-6 yrs.)	-	-	
No. 148		♂	Maturus?	-	?	

Age: [Infant I : < 1 yr, infant II : 1 ~ 4 yrs, Infant III : 5-9 yrs., Child : 10-14 yrs, Juvenilis : 15-19 yrs, Adultus : 20-39 yrs, Maturus : 40-59 yrs, Senilis : 60- yrs, Adult : Exact age unknown, but not subadult]  
\* : ( ) - The floor of loculus fallen through with skeletons  
\*\* : AKJ - Arthropathy on the knee joints (○ : present, × : absent)  
\*\*\* : P. I. A. - Polyarticular inflammatory arthritis.

表2 C号墓出土人骨の詳細 (Nakahashi 94a)

違いがあり、未成年単独という点では一致がある。

#### ④主室床面埋葬

主室床面には、10-12ヶ月の乳児1体、前室右側壁に沿って新生児1体、6ヶ月未満2体、7-8ヶ月1体が埋葬されており、前室奥の改築後左側壁の角に5-6歳の子供が埋葬されていた。主室の埋葬土壌の上には板石がのり、横に壺の上半部を逆さまにしてモルタルを塗った水鉢が置かれていた。他の土壌には特別な施設は認められなかったが、ほとんどすべての埋葬には副葬品があり、椰棚の埋葬とは大きな違いがあった。年齢も、左側壁沿いの1例を除き、1歳以下の乳児であり、特に前室では、8ヶ月以下に限られていた。

#### ⑤小結

C号地下墓全体では、成人42体、未成年19体、うち成人は男性30体、女性13体であり、出土人骨の性別と年齢に偏りがある。未成年の人骨が少ない点、未成年の中でも、特定の年齢に偏りが見られる点は、中橋がすでに指摘している<sup>(10)</sup>。埋葬場所にも、明らかな年齢による偏り、性による偏りが認められた。

### 2) 埋葬場所の持つ意味について

東南墓地C号墓で検出した埋葬状況について、一応の解釈を試みたいと思う。パルミラ遺跡での過去の発掘調査では、人骨の詳細な検討が行われていない、もしくは報告されていないため、比較検討は次稿に譲るとして、まず、今回の発掘調査資料からのみの解釈をおこなう。

#### ①性別による埋葬場所の違い

主室奥室正面には、碑文の書かれた彫像が3体あり、この墓の建造者イアルハイと直系の息子達のものであった。すなわち、主室正面はイアルハイ家の中心的人物で葬られていた場所であり、この場所に男性が多いこと、女性の彫像がない点は、イアルハイ家の人々の社会観を知る上で重要である。

また、イアルハイの長男シャルマの彫像には、「ハトラ HTL」と呼ばれたイアルハイの息子シャルマ、あぁー！」という碑文と共に、「彼の母、モラの娘」と言う碑文が書かれていた。シャルマはイアルハイの息子であるから、当然「彼の母」はイアルハイの妻であったのだが、長男シャルマの母として、シャルマと共に葬られた可能性が高い。事実シャルマの椰からは熟年の女性と彫像に彫られていた子供？の人骨も出土している。これは、息子のシャルマを通じて、イアルハイ家と血の繋がったが故に、この場所に埋葬することが可能になったことを示していないだろうか。同様に考えると、碑文はないが、椰棚 ML2-4では、女性の埋葬は1体に限られており、その家系のそれぞれの母親が葬られている可能性が強いと考える。

以上のことから、主室奥室正面には、イアルハイ家の男系を中心に埋葬されていたと考えることができる<sup>(11)</sup>。

ただし、柳棚 ML1は例外になる。女性が4体埋葬されており、男女比が2 : 1となる。ここに埋葬された女性がどのような関係で埋葬されたのか、明らかにし得ないが、最も多くのランプや香炉が墓前に置かれていた点も特殊であったことを指摘したい。想像をたくましくすれば、成人したイアルハイの娘達と考えられる。

## ②年齢による埋葬場所の違い

中橋は、1歳未満では、本来なら多くあるべき新生児の埋葬が極端に少ないこと、2 - 3歳児がなく、4 - 5歳児が目立つ点は、不自然であると述べている<sup>(12)</sup>。

埋葬位置と副葬品を見ると、前室左側壁は未成年、特に4 - 5歳以上の子供の埋葬の特徴があり、床面は1歳児以下の副葬品を伴う埋葬に特徴が認められる。1歳児以下の埋葬は、柳棚にも認められるが、副葬品を伴う単独の埋葬はなく、埋葬される事情が異なっていたことが予想できる。

中橋の示唆したように、子供に対して選択的な埋葬が行われたとするならば、埋葬されていた子供達の死が特殊なものであったことが想像できる。また、当時の、1歳未満の子供と、4 - 5歳の子供に対する社会的認識の違いも、暗示しているように思える。

以上、C号墓の埋葬から考えた推論と可能性の指摘であるが、中橋が指摘しているように、他との比較検討が重要であり、このような仮説が成り立ち、また、パルミラ社会に一般化し得るのかは、他の墓の詳細な人骨資料が呈示されるのを待たねばならないであろう。

(続)

## 註

- (1) Wood R. 1753
- (2) Higuchi, T. and Izumi, T. eds, 1994
- (3) Gawlikowski M. 1970
- (4) 小玉新次郎 1994
- (5) Gawlikowski M. 1970
- (6) Wiegand Th. 1932
- (7) Izumi T. and Shimizu Y. 1994
- (8) Ingholt H., 1954
- (9) Nakahashi T., 1994a
- (10) Nakahashi T., 1994b

(11) Nakahashi T., 1994b

(12) Nakahashi T., 1994b

#### 引用・参考文献

- Abdul-Hak S. 1952, L'hypogée de Ta'ai, *Annales archéologiques de Syrié* 2, pp. 193-251, Damas
- Izumi T. and Shimizu Y. 1994, Excavation of Tomb C, *Tombs A and C Southeast Necropolis Palmyra Syria, Surveyed in 1990-92*, PRCSR vol. 1, RCSR, Nara
- Higuchi, T. and Izumi, T. eds, 1994, *Tombs A and C Southeast Necropolis Palmyra Syria, Surveyed in 1990-92*, PRCSR vol. 1, RCSR, Nara
- Ingholt H., 1935, Five dated tombs from Palmyra, *Berytus* 2, 57-120
- Ingholt H., 1954, *Palmyrene and Gandharan Sculpture*, Yale University Art Gallery,
- Gawlikowski M. 1970, Tombeaux Souterrains, *Monuments Funéraires de Palmyre*, pp. 107-128, Warszawa
- Nakahashi T., 1994a, Human Skeletal Remains Unearthed from *Tombs C and A, Tombs A and C Southeast Necropolis Palmyra Syria, Surveyed in 1990-92*, PRCSR vol. 1, RCSR, Nara
- Nakahashi T., 1994b, Problems Surrounding the Skeletal Remains Unearthed from Tomb C, *Tombs A and C Southeast Necropolis Palmyra Syria, Surveyed in 1990-92*, PRCSR vol.1, RCSR, Nara
- Schmidt-Colinet A., 1987a, Palmyrenische Grabarchitektur, *Palmyra Kunst und Kultur der Syrischen Oasenstadt*, pp. 214-227, Stadtmuseum, Linz
- Schmidt-Colinet A., 1987b, Das Tempelgrab einer Aristokratenfamilie, *Palmyra Kunst und Kultur der Syrischen Oasenstadt*, pp 228-243, Stadtmuseum, Linz
- Stark J. K., 1971, *Personal Names in Palmyrene Inscriptions*, Oxford: Clarendon
- Wiegand Th. 1932, *Palmyra, Ergebnisse der Expeditionen von 1902 und 1917*, Berlin
- Wood R. 1753, *The ruins of Palmyra, otherwise Tedmor, in the desert*, London
- 泉 拓良1994, 「シリア・パルミラにおけるローマ化の問題」『文化財学論集』, pp. 843-854、奈良
- 小玉新次郎1980, 『パルミラー隊商都市ー』, 世界史研究双書24、近藤出版、東京
- 小玉新次郎1994, 『隊商都市パルミラの研究』, 東洋史研究叢刊之48、同胞舎出版、京都